

2026

7.1 (水)

12:10
12:50

12:10-12:15

◆発表者紹介

12:15-12:40

◆プレゼン

12:40-12:50

◆質疑応答

オンライン
(Zoom)

登録はこちら▶▶

https://us02web.zoom.us/webinar/register/WN_fCLMdvy9TBmEkeLkX5ISeQ

【技術支援】九州大学 Q-AOS

生活時間の貧困研究： 測定手法と課題



Key Words

多次元の貧困

時間の貧困

浦川 邦夫 教授

九州大学 経済学研究院 経済工学部門

1977年に兵庫県神戸市で生まれました。慶應義塾大学商学部を卒業後、京都大学大学院経済学研究科にて2007年に博士(経済学)を取得しました。主な論文には「生活時間の貧困研究」(2026年)および「日本企業における男性育児休業の普及」(2023年)があり、後者は令和5年度労働関係論文優秀賞を受賞しました。現在、学部・大学院で社会保障や計量経済学、福祉政策などの科目を担当しています。

本報告では、所得だけでなく「生活時間」の観点から貧困を多角的に分析する研究を紹介します。日本では長時間労働や家事・育児における無償労働の男女格差が顕著であり、特にひとり親世帯は所得貧困と時間貧困の双方に陥るリスクが高くなっています。また、ふたり親世帯でも、特に就学前の子どもを持つ共働き世帯では、妻の時間貧困率が個人単位で見ると高い特徴があります。さらに、時間貧困は様々な健康リスクとも関連しています。今後の課題として、家事の外部化とウェルビーイングの関係や、親の時間貧困が子どもの長期的なアウトカムに与える影響など、時間の貧困と家庭生活のQOLとの関連性の検証が挙げられます。